

3. 測量・レーダー探査の成果

將軍塚古墳は、松山台地の南縁辺に立地しており、都幾川を挟んで高坂台地を望んでいます。全長115mを超えるとても大きな前方後円墳ですが、その主軸は北西—南東にわずかに傾いていて、軸線の北の延長上には五領遺跡、南の延長上には反町遺跡と呼ばれる古墳時代前期の有名な集落遺跡が立地しています(図1)。晴れた日には、都幾川が形成した氾濫原の遙か向こうに富士山を望むこともできます。その墳丘の規模から、比企地域において非常に大きな力を持った人物が葬られたお墓と考えられます。この人物が死後に見守る先は、前方部が向かう広大な低地に広がる集落や田畑だったことでしょう。

調査では、学生たちがチームを作って、トータルステーションと呼ばれる測量機械を使用し、墳丘の表面を1点1点計測していきました。この点(座標)を、GIS(Geographic Information System: 地理情報システム)と呼ばれるソフトウェアで表示したのが、図2です。1つ1つの点を計測する作業を一ヶ月継続し、合計187,617点の座標を取得しました。この図は、平面に取得した座標を表示したのですが、墳丘全体が非常に密度で計測出来ている点に分かるといえます。なお、1つ1つの座標は、X・Y・Zという空間情報を持っているので、PC上では立体的に墳丘を表示し、分析をすることが可能です。

この座標の点群をソフトウェアで処理して、DEM(Digital Elevation Model: 数値標高モデル)と呼ばれるデータを作り、そこから10cmの等高線を描出したのが図3になります。非常に精密な測量図が作成できたことがわかんるといえます。この測量図から、將軍塚古墳は後円部が3段、前方部が2段の土盛りで築造されている点が多明かになりました。つまり、2段重ねられた前方後円墳、その後円部の上にもう1つの大きな円丘が置かれているようなイメージです。非常に高い後円部の墳頂に被葬者が埋葬される墳丘の形式で、古墳時代前期に特徴的な立体構造である点が多わかっています。將軍塚古墳は典型的な前期古墳と言えるでしょう。前述した集落や田畑、あるいは富士山を望む象徴的な立地も、前期古墳に多い特徴です。

最後に、地中レーダー探査の成果を図4に示しました。注目したいのは、後円部墳頂に非常に大きな反応が見られる点です。地表下175cmぐらより下に、川原石で構築されたと思われる埋葬施設が想定できます。南北8m、東西3.5mほどで、中央が凹んだ舟形の形状をしています。これは、木棺などを安置するための部屋(槨)と思われる。木棺などを礫槨に安置した後に上部を粘土で覆ったものと考えられます。このような堅穴系の埋葬施設が確認された点も、墳丘の構造で想定される前期説を補強するものといえます。

おわりに

將軍塚古墳の調査では、墳丘が後円部3段、前方部2段の立体構造を持つ点、そして後円部中央に堅穴系の埋葬施設が存在する点が多明かになりました。五領遺跡や反町遺跡が最も活性化する古墳時代前期後半に、將軍塚古墳が築造された可能性が非常に高くなってきました。將軍塚古墳が前期の大型前方後円墳であるとすれば、後期に大型の前方後円墳が築かれた埼玉古墳群との関係が問題になってきます。比企の勢力が大宮台地の埼玉古墳群に進出したのでしょうか、あるいはまったく別の勢力が大宮台地に勃興したのでしょうか。『日本書紀』安閑紀に記載される「武蔵国造争乱」の伝承が、その謎を解く手がかりになるかもしれません。

以上、將軍塚古墳の年代の謎が解明されつつありますが、1つの謎が解ければ、また次の謎が出てくることになります。1つ1つの実証的な作業を積み重ね、歴史の謎に挑んでいくのが、考古学研究の醍醐味でもあります。地域の大切な文化財であると同時に、大きな謎を秘めた將軍塚古墳。世代を越えて文化財を守り、その価値を正しく位置づけ、次の世代に伝えていくこと、これが現代に生きる私たちの役目と考えています。

引用文献 ※図と写真は(城倉・青木・伝田編2017)より引用しています。

甘粕 健 1976「三千塚古墳群に関する覚え書」『北武蔵考古資料図鑑』校倉書房

金井塚良一 1979「比企地方の前方後円墳—北武蔵の前方後円墳研究(1)—」『埼玉県歴史資料館研究紀要』1

城倉正祥編 2016『山室姫塚古墳の研究』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所調査研究報告 第1冊

城倉正祥・青木 弘・伝田郁夫編 2017『デジタル技術を用いた古墳の非破壊調査研究』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所調査研究報告 第4冊